

特集にあたって

札幌麻生脳神経外科病院 飛驒一利

9月に入り新たなコロナ患者の発生の第5波もピークアウトしたように思われますが、9月12日の緊急事態宣言の解除は東京都などはまだ延長されるようです。コロナ禍が始まって以来、出版業界ではテレワークが続き、雑誌、本などの編集の効率が悪くなり、大変な状況が続いているようです。

本特集は実は予定して集めた原稿ではありません。以前に岩崎喜信先生と私が編集した『脊椎・脊髄疾患の外科』の改訂版を私と小柳泉先生がかなり時間がかかりながら編集しているのですが、三輪書店からの依頼により、その中の原稿より抜粋し構成した特別号となりました。

教科書の原稿をプレリリースの形で特別号で出版するなど聞いたことがないとお怒りになる諸氏もいるかもしれませんが、小柳先生が執筆した頸椎椎間板ヘルニア、頸部脊椎症、頸椎後縦靱帯骨化症、そして私との共同執筆の髄内腫瘍のチャプターは、手前味噌で申し訳ありませんが、かなり力を入れて執筆した内容です。中でも髄内腫瘍は23ページにも及ぶ大作となっております。2016年にWHO分類が大幅に変更となり、腫瘍の分類も腫瘍の表現型（phenotype）と遺伝子型（genotype）の両者に基づいた分類になりました。病理学的にさまざまな髄内腫瘍の症状、画像診断、外科治療、後療法を含めて詳細に執筆しております。

読者の皆様の日々の診療、さらに専門医の勉強等にお役に立てれば幸いです。